

処女、三、四、五十路食べ比べ。

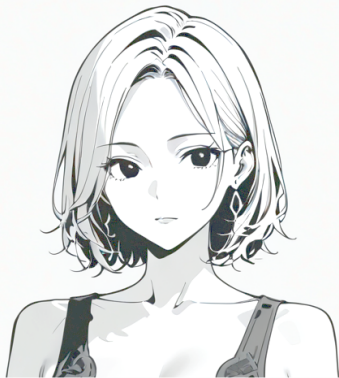
熟女の妊娠出産



三十路



四十路



五十路



処女、三、四、五十路食べ比べ。熟女の妊娠出産

## 一卷

弾

同人サークルぶるずあい

表紙・挿絵 弾 (stable diffusion XL)



## 目次

三十路処女、大原香帆の場合

7

三十路処女セックス

12

体験版あとかき

32



## 三十路処女、大原香帆の場合

俺は待ち合わせ場所の喫茶店でコーヒー片手に依頼主を待っていた。

昼下がりの店内は静かで、やや薄暗い、男女が密会するのにぴったりだった。

カランと音を立て入口のドアが開き、一人の女性が現れた。

艶やかな黒髪のショートボブ、少し三白眼だが整った顔立ち、パーカーの布地を持ち上げる

豊かな双丘。くびれた腰に大きな尻。

女は俺の顔を見ると、何かに気がついたように目を開いた。

どうやら依頼主のようだ。俺は彼女の顔を知らないが、向こうには顔写真を送ってある。

「おおはらかほ大原香帆さんですか？」

「は、はい」

「私は竿師のおおぬきやとなが大貫太長です」

俺は竿師、元AV男優のセックスのプロだ。香帆さんの処女を処理して、最高のセックス体験を提供するのが、今回の俺の仕事だ。

彼女は三十路処女だった。

香帆さんもコーヒーを頼み、二人で向かい合った。周囲には俺たちだけしかない。

「え、えへ……その私みたいなのでも、セックスできますか？」

「貴女はどう見ても、美女ですよ。高齢処女になってしまったのは、運悪く出会いが無かっただけです」

香帆さんは驚いて目を見開いた。

「私、オタクで喪女だし、そんなこと言われたの初めてです」

「このご時世、高齢処女ってけっこう多いんですよ」

「はあ……そうなんですか、えへっ」

手遊びしながら恥じらう様子は小女のようにだった。

ふんわりと香帆さんから甘い体臭がした。ミルクを思わせるその香りは香水ではない。少し発情しているのか、処女臭と思われるチーズ臭もした。

間近で見るとかなりの上玉だ。しかし恋愛にはかなり奥手なんだろうと思われた。

まあ、そもそも普通に恋愛ができる女性はロストバージンサポートなんか利用しない。

「香帆さんは恋愛経験もあまりない感じですか？」

「あの……一応、ちよつと付き合ったり、良い雰囲気になった人はいます。でも、エッチはしませんでした」

「なるほど、解りました」

俺は頷いてから彼女を見た。

♀

（えへっ、竿師さんカッコイイ）

香帆は子宮がキュンキュンして、膣にお湯がさすような感触を味わっていた。

「緊張してますか？」

太長が尋ねる。香帆はこくこくと頷いた。

喉が渇く、ドキドキする。おっぱいは張ったようにブラがキツイ。へその下が痛い。何か少し汗も出てる。

イコール緊張していると香帆は思った。

実際には熟れきった身体に溜まりきった性欲が、極上の男を前に興奮しているだけだ。

「私はプロですので、それなりに報酬はいただきます」

「あっ……はい、分かってます。ホストとかはあんまり信用できないし、エッチだけなら竿師が一番だって聞きました」

一流の竿師はテクニクやサービスだけではなく、性病にも相当に気を使っているという。出会系の男なんかよりずっと安全だ。

「それではサポートはどうします？」

「そっ、……その、お願いします」

（ああ……私、この人とエッチしちゃうんだ）



子宮がズリ下がり、甘く痛む。

（今日は大丈夫な日、私バッチリ計算してる。ああ……でも排卵日みたい、卵巣が甘痛い）  
コーヒーの味もよくわからない。気付けばお冷をガブガブ飲んでいた。

「それでは、ホテルへ行きましょうか」

「えへっ……は、はい」

変な笑みが思わず出た。それは恥ずかしさだったり、期待だったり、発情だったり。普段、香帆が抱かない。色々な感情が溢れたものだった。

太長と香帆は席を立つ。伝票は太長が持っていく、さっさと二人分払ってしまった。

太長はそつと香帆に寄り添うと、彼女をリードした。腰の裏に手を当てたのだが、ピッタリと子宮の裏に手を当てた。

（なんか……凄い安心感）

そのままホテルまで連行されてしまった。

## 三十路処女セックス

ホテルへチェックインすると、俺達は二人で風呂に入った。

香帆さんの裸体は美しかった。肌の白さはまばゆく、バストはグラビアアイドル級で腰は蜂のようにくびれ、尻は大きい。張り出した骨盤は大きな赤ちゃんを孕めるだろう。じゃれあうようにお互いの身体を洗うと、彼女は子供のように笑った。

「何だか楽しいですね」

「エッチは楽しいですよ」

俺は笑顔でそう言った。

「二十代の時、スケベ親父にセクハラされたんです。凄く気持ち悪かったです。」

そうですか、と俺は頷き、彼女の頭を優しく撫でた。

そんな体験が彼女をセックスから遠ざけたのかもしれない。

「でも、竿師さんは素敵です」

「こんな仕事ですから、嫁はできませんし、短い逢瀬おうせを重ねるだけ。寂しいですよ」

「お嫁さんが欲しかったら、私になってあげますよ」

俺はもう一度、頭を撫でた。

「キス……しましょうか？」





「えへっ、は、はい……」

ちゅ……ぶちゅちゅ……ちゅぶ……ちゅぶぶ。

香帆さんの唾液は甘く、歯磨き粉のミントの香りがした。

舌は柔らかく、ツブツブがはつきりしていた。これはフェラチオも期待できそうだ。

♀

（あはあ……頭、ぼうっとしちゃう、キスってこんな凄いんだ）

舌を揉みくちやにされ、唾液交換をされ、頭が蕩けそうだ。

心臓がドキドキする。こんなに心音がはつきりしたのは、生まれて初めてかもしれない。

「あっ……おっぱい……らめえ」

太長の手が香帆の乳房に伸びる。たわわな胸を下から持ち上げられた。

「これは、おっぱいで遊んでましたね」

「ええっ!? そんなのわかるんですか?」

「乳腺が柔らかくなって、発達してますからね」

香帆の顔がかあつと赤くなる。

（やあ、は、恥ずかしい）

「オナニーはたしなまれるんですか?」

「えへっ、あの……週に二三回、クリトリスオナニーをします♡」

太長が香帆の股間に手をのばし、秘部に触れた。

「あっ♡あんっ♡」

「確かにクリはちよつと大きめですかね、処女膜は健在つと、膣に何か入れたことはありますか？」

「な、ないです。指とかタンポンも入れたことはありません」

「それじゃあ、初挿入は私の指ですよ」

つぷりと粘膜が擦れる音が鳴り、太長の人差し指が処女膜をくぐった。

♂

良い膣だ。俺は思った。膣の粘膜は熟していて柔らかい。粘りもしっかりしている、そして処女なので穴が明らかに狭い。これは極上の膣だ。三十路処女でなければこうはならない。

「それでは本格的にセックスしましょう」

「はっ、はい♡」

二人でバスルームを出て、バスローブ姿でベッドに並んで座った。

再び、どちらともなくキスをした。ねっとりとした長いキスだった。

「ふっ……はあ♡」

俺は香帆さんのバスローブを脱がした。下から素晴らしい裸体が現れる。

「素敵ですよ……香帆さんの身体」

「私……本気でエッチしたいです……処女だけど」

彼女の目が好奇心に光っていた。

「では、フェラチオからお願いできますか？」

「は、はい……えへへっ、が、頑張ります♡」

「まず、舌でペロペロ舐めてみましょうか」

俺がペニスを香帆さんの眼前に見せつけると、蕩けた表情で「凄い♡」と呟いた。

「えっと……、それじゃあ舐めますね」

彼女は舌を出し、りんご飴を舐めるかのように、逸物を舐めた。

「どんな味がしますか？」

「味……はあんまりしません、先っぽにヌルヌルしたのが出てます。ちよつと青臭いですけど……好きな匂いです」

俺は香帆さんの頭を撫でた。彼女が目を細める。

「次は少し、啜くわえてみましょうか？」

「はい……ぱく♡ん、じゅちゅる……じゅぶぶ」

「そう、上手ですよ。歯を立てないよう気を付けて」

睨んだ通り口オマンコも名器だった。ザラザラした舌が亀頭を這いまわる。少し粘度の高い唾液が潤滑油になってゾクゾクする気持ち良さだ。



♀

（あれ？ お腹痛い……出かける前に浣腸して、綺麗はずなのに）

へその下が熱くなつて酷く痛い。ただその痛み、不快ではなかった。

青臭い太長の汁の香りに反応したように腹痛がした。

（あつ……♡これ子宮だ。子宮がキュンキュンしてるんだ♡）

子宮は甘く痛み、卵巣も熱を持ち、膣はムズムズした。身体の発情が止まらない。

（凄いペニス。熱くて固くて大きい、これのせい？）

処女でも太長の逸物が素晴らしいのは、よく解った。

（竿師さんの根元まで入ったら、完全に子宮まで届いちゃう）

「んっ、ちゅぶぶっ……ぶちゅ……じゅるるる」

「オチンポ美味しいですか？ フェラチオ初めてにしては上手ですよ」

「えへへっ、竿師さんのオチンポ好きです♡美味しいし良い匂いです」

香帆はしばらく夢中でペニスを舐めた。段々とその表情は蕩けてくる。

脳が幸せホルモンを分泌して、香帆は多幸福感に包まれた。

今はまだセロトニン系の幸福感や安心感だが、セックスが進んでくればベータエンドロフィン等の脳内麻薬が出てくるだろう。

「それでは今度は私が香帆さんのアソコを舐めますよ」

「えっ、えへっ……そ、その、臭くないですか？」

「処女臭はしますけど、とても良い匂いですよ。自信をもって大丈夫です」  
太長は手慣れた手つきで、香帆をベッドに転がすと、足を開脚させた。

「色もとても綺麗だ。ああ、処女膜が見えますね」

「うわあ、み、見られちゃってる。私の大事なところ、は、はずいっ」

「それでは舐めますよ」

じゅぶっ……じゅぶぶぶっ……じゅちゅるっ……じゅるるるっ！

「ひっ♡！ ひあ♡！」

クリトリスと膣口に快感が走る。オナニーの時より数倍は気持ちが良い。腰がふわふわと浮くような感じがする。

♂

この性器、良いチーズ臭がするな。処女の恥垢の発酵具合も素晴らしい。三十路処女の中でもかなりレベルが高いぞ。

「香帆さんのココ、凄く美味しいですよ。ずっと大事にした乙女の処女臭がたまらないです」  
「え、えへっ、あ、ありがとうございます♡」

膣からは豊富なラブジュースが溢れる。膣口共々それを舐めあげると、舌を尖らしてクリトリスを舐める。





じゅぶっ！ じゅぶぶぶっ！ じゅちゅっ！ じゅちゆるるっ！

俺は処女には刺激が強い、本気のクンニリングスを香帆さんに施した。ものの数分で香帆さんの表情は蕩けてくる。

「あっ♡それ凄いですう♡私、イッチやう、や、らめえ♡」

香帆さんがビクビクと痙攣けいれんすると、尿道から潮を噴いた。俺は顔面でモロに潮を浴びる。

「やあっ！ すみません、私お漏らしなんかして、うう、すみませんでしたあ」

「お漏らしなんかじゃないですよ。これは潮吹きです。こうなるように私がテクニクを使っ  
たせいです。香帆さんの責任ではありません」

「そ、……そうなんですか？ えへっ噴いた瞬間、凄く気持ち良かったです♡」

ちよつと涙目になりながらも、香帆さんは微笑んだ。

「香帆さんには素晴らしいエッチの才能がありますよ」

これはお世辞じゃない。鍛えればく女優か一流の高級ソープの泡嬢あわじょうにもなれる才能だ。

「お互い、気分が高まってきましたね。そろそろ本番エッチに進んでもいいのですが」

「は、はい、私もそろそろエッチしてみたいです」

「その前に個人的にやってみたいプレイがあるのですが」

香帆さんが小首をかしげて俺を見た。

「こ、……これでいいんでしょうか？」

香帆が両手で胸を下から持ち上げた。胸と胸の谷間には太長の逸物が挟まっている。

（そ、想像より恥ずかしい……やっぱり私のおっぱいってエッチな目で見られてたのかな）

「ああ……素晴らしいボリウムだ。一目見たときから、このおっぱいでパイズリしたいと思っています」

「えっと……挟んでしごくんでしたよね……うんしょ……うんしょ」

心臓のすぐ近くに熱い逸物がある。硬さや存在感も凄い、いつもオナニーで胸を揉むときより乳腺が気持ち良い。

ずちゅ……ずちゅ……ずちゅ……ずちゅ。

太長の先走り汁と香帆の汗が潤滑剤になって、ペニスを滑らかにしごけた。

「うっ！ ううっ！ むっ！」

太長が短く声をあげる。

（竿師さん……私の身体で気持ち良くなってくれてるのかな？）

「え、えへへっ……ど、どうですか？」

「とても気持ちが良いですよ。このオッパイは弾力もあつて、肌は滑らかだ。パイズリには最高の乳房ですよ」

（嬉しい……あっ♡子宮が降りてきちゃった♡）



膣がムズムズして落ち着かない。愛液も少したれてしまっていた。内腿を擦らせながら、発情に耐える。

「オチンポ、欲しいんですか？」

香帆は頷く。

「ちゃんと言葉にしてみてください」

「あの……えへっ♡私、オチンポ入れて欲しいです♡わ、私の処女で気持ち良くなって欲しいんです♡」

「よく言えましたね。それじゃあ、香帆さんの処女をいただきますね」

太長はパイザリの姿勢から、一気に身体を起こすと、香帆をベッドに転がした。

「破瓜には正常位が良いですよ。膣に無理がかからないし、こうやって香帆さんが女になる表情が見えます」

「えへへっ♡そんな、私の顔なんて」

「とつても可愛いです。じゃあ入れますよ」

ぶちっ！　ぶちぶちぶちっ！　ぶつっ！！。

（あっ♡痛っ！　思ったより痛いっ♡）

「らめえっ！　くううんっ♡！」

♂



「ふむ、前戯はかなりしたはずですが、無痛破瓜とはいきませんでしたか」

処女膜もちよつと硬くなつていたからな、とりあえず奥まで入れて、それから慣らすか。

「あ、あの、だ、大丈夫です……。破れた瞬間は痛かったけど、もう痛くないです」

「そうですか、一旦奥まで入れてみて、様子を見ましょう」

俺はペニスをゆつくりと進めた。やはり膣ヒダは柔らかく熟していて、熟女の絡みだが、締めりは処女だ。たまらない。

「あつ♡はああ♡うんっ♡やんっ♡」

所々、膣ヒダが癒合ゆごうしていて、それをペリペリと剥がしながら膣を進む感触は、処女性交の大きな楽しみだ。新雪の雪道のような、誰も触れたことのない聖域に立ち入る時の何とも言えない優越感。

やがてコリコリとした最奥に辿り着く。

「全部入りましたよ。どうですか？ 香帆さん」

「あつ♡ああああ♡凄い、し、子宮まで届いてます」

よほど初めての膣性感が良かったのか、彼女はすでにアへ状態だった。

「奥で感じるタイプかな？」

俺は逸物の先端で白を引くようにポルチオを攻めた。

「あつ♡あんっ♡あああつ♡奥、凄いですう♡」

「処女だったのに子宮で感じちゃうんですね。これはやっぱりエッチの才能がありますよ」

香帆さんが嬉しそうにセックスにむせび泣いた。まだ痛みがあるかもしれないので、動きはあくまでゆっくりだが。相当に感じているようだ。

「ああ……♡ エッチがこんなに良いなんて、知らなかった。もっと早く、竿師さんに会いたかったよお」

「これからの性生活で、喜びを取り戻していきましょう」

香帆さんが目に涙を浮かべながらこくこくと頷いた。

「痛みはまだありますか？」

「あんっ♡ えと……そのお♡ もう痛くないです♡」

「じゃあ少しづつ動いていきますよ。痛かったり辛かったら言ってくださいね」

ねちっ……ねっちゃんねっちゃん……ぬちゅ。

「ああんっ♡ あおっ♡ やだ、気持ち良い♡」

これは想像以上の膣だ。三十路処女の相手も初めてではないが、これほどまで処女と熟女の良さを併せ持った膣も珍しい。

「香帆さんのココ、とても気持ち良いですよ。処女と熟女の良い所を兼ね備えています」

「そ、そんなのあるんですか？ あっ♡ はあん♡ 頭ビリビリっとなる♡」

この処女のボーナスタイム、味わい尽くさないと。

♀

（ああ……私、三十路処女で良かったんだ……私の処女は今日、竿師さんへ捧げるためにあったんだ♡）

嬉しさに、じわりと涙が滲んだ。自分の身体で男が気持ち良くなっていることがたまらなく嬉しかった。

「えへへっ♡も、もう痛くないんで、好きに使ってください」

「それでは一緒に気持ち良くなる場所を探していきましょうか」

「はっ、はい♡お願いします♡」

「まずはGスポットです」

それまで子宮をコツコツ叩いていた太長のペニスの亀頭が、ぐっと入口近くまで戻る。それだけでゾクゾクしたのだが、次の瞬間にもっと驚いた。

「あっ♡す、凄いです♡」

「これはかなり良いカズノコ天井ですね。感度も抜群だ」

膣の入口から数センチ進んだお腹側の場所にある、ザラザラとした性感センサーが集中するところ、そこがGスポットだった。

「あっ♡あんっ♡あうううっ♡」

（やだ、変な声が出ちゃう）



「スポットを擦ったり、亀頭を押し付けられて伸ばされると、目の前に火花の散るような快感が来る。」

「きつ、気持ち良いです♡」

「感度が高いんですね。感度が良いほど、良い膣だと言いますが」

「そっ♡そうなんですか♡？」

自分の身体に自信なんて持ったことのなかった香帆は、セックスを通じてプライドの面でも女になりつつあった。

「普通はもっと調教が進んできてから、感度が良くなるものですが、処女でこれとは、将来が楽しみです」

「う、嬉しい♡もっと、もっと私を調教してください」

「それでは子宮の感度もう一度確認してみましよう」

今度はぐうっとペニスが奥をつく。

「おほっ♡おっほう♡」

「おやおや、おほ声でちゃってますね」

「え、えへっ♡奥が凄いです♡」

（子宮、気持ち良い♡竿師さんの赤ちゃん、妊娠したかったな）

こうなると、安全日を計算してきた過去の自分に恨みが言いたい。

♂

想像以上の膣にそろそろ俺も限界が来た。

「香帆さんっ！ そろそろ出しますよっ！」

「あっ♡あんっ♡きよ、今日は大丈夫な日です。中出ししてください♡」

「解りましたっ！ うおっ！ こ、これは搾り取られるっ！」

どびゅっ！ どびゅびゅびゅびゅっ！ どびゅゝゝゝ！



## 体験版あとがき

この度は体験版を読んでもいただき、誠にありがとうございました。

また性懲りもなくエロ小説を書いてしまいました。今回は短編三部作で三、四、五十路と処女が出てきます。

小説の形式でちよつと冒険をしており、人によつては読みにくく感じるかもしれません。視点の切り替えですね。ここでちよつと実験をしています。

体験版がすんなり読めたのなら、たぶん大丈夫だと思います。

今回はちよつと良い所で終わっております。続きが気になる！とか妊娠出産が見たい！という人はぜひ同人誌の方、手に取って見てください。

二万六千字の小説に挿絵24枚とボリュームはそこそこあります。同人誌は一部税抜き200円とお買い得価格になっておりますので、よろしかったらぜひぜひ。

最後に宣伝です。当サークルは今年で活動16年目になる小説系同人サークルです。エッチなライトノベルやノベルゲームを作っていました。

遅筆な作者ですが、さすがに16年書いているので、作品は沢山あります。無料で見れる作品も多数あるので、よろしかったらサークルホームページに遊びに来てください。

URLは奥付に貼ってありますので、そちらからホームページに行けます。

以上です。それではまたどこかで会いましょう。弾でした。

# 処女、三、四、五十路食べ比べ。熟女の妊娠出産 一卷

2026年 2月 8日 初版

## 奥 付

発行 同人サークルぶるずあい

著者 弾

URL <https://bulls-ai.just-size.net/>

E-Mail [writer@sample.org](mailto:writer@sample.org)

イラスト 弾 (stable diffusion XL)

URL <http://illustrator.sample.org/>

E-Mail [illustrator@sample.org](mailto:illustrator@sample.org)



本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
(<https://sss.sylphid.jp/>)